

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

ニゴイ

Hemibarbus barbus

本種はコイ目コイ科カマツカ亜科の仲間です。分布は、国内では本州、四国の瀬戸内側、九州北部などに自然分布し、国外では中国大陸、朝鮮半島、台湾、海南島で知られています。近年、このニゴイは、従来のニゴイとコウライニゴイ(*Hemibarbus labeo*)の2種に細分類されました。コウライニゴイは口の周辺の皮弁がニゴイよりも発達していますが、幼魚期の個体は未発達で、一般的にこの2種の判別は難しいです。



顔が細長いので
コイと見分けられる

河川の中・下流や汽水域、湖沼や池などの砂底に生息し、体長は最大で50cmほどに達します。繁殖期は春から初夏の時期で、この時期のオスは全身が黒っぽくなり、口の周辺には追星という白い突起物がみられます。産卵は、降雨



後、群れで砂礫底などに穴を掘って行われます。口には1対のひげがあり、食性は雑食性で、付着藻類のほか、ユスリカの幼虫やカゲロウ・トビケラ類などの水生昆虫、成魚になると小魚なども食べます。コイに似ていることからニゴイと呼ばれるようになったそうですが、ニゴイの体は細長く、尾びれの切れ込みも深く、鼻先が前に突き出ているので、「キツネゴイ」の名前で呼ばれる地域もあります。地域によっては食用にされますが、小骨が多いので天ぷらや唐揚げなどに使われます。水質汚濁や富栄養化に強く、最近各地で増えています。ルアーフィッシングの対象魚として人気が出ていますが、アユを食害することもあり、釣り人によっては敬遠されています。

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

under the water

the waterside

the sky & land

水辺の

虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

人を自然に近づける川いい会 捕獲番長 川島 大助

イシマキガイ

淀川の淡水域でみられる巻貝はイシマキガイとカワニナ類、タニシ類がいます。カワニナ類やタニシ類は生涯を淡水で過ごしますが、今回ご紹介するイシマキガイは海と川を行き来する回遊性の巻貝です。

成貝の殻長は25mm程度で、殻頂部がカルシウムイオンに乏しい河川水によって侵蝕され欠けています。殻上面は緑褐色の殻皮に覆われて細かい三角形の斑紋が並びます。春から夏に交尾して、メスは礫等にドーム状の卵嚢を産み付けます。孵化した幼生(ベリジャー幼生)は海へ流下し、植物プランクトンを摂餌しながら浮遊生活を送ります。幼生は汽水域で着底、変体して幼貝になります。幼貝は礫の表面を匍匐し、付着藻類等の微生物が形成するバイオフィルムを歯舌で削り取って摂餌しながら、徐々に汽水域～淡水域へと遡上し、成貝になります。

本種は、淀川では淀川大堰よりも下流の礫帯でごく普通に見られますが、河川改修などの影響で個体数が減少するケースもあり、大阪府レッドデータブックでは「要注目種」となっています。また、水質指標の生物(水質階級Ⅱ=ややきれいな



水槽のガラス面では
食っている姿が観察しやすい



水域)にもなっています。さらに、イシマキガイは観賞魚水槽等では「コケとり掃除屋」としても重宝し、市販もされていますが、ぜひフィールドで採集して水槽を掃除の様子などを観察してみてください!

the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100

サトイモ科 ボタンウキクサ

Pistia stratiotes

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



原産地は南アフリカ。多年生の浮遊植物。「ウォーターレタス」という名前でホームセンターで大量に販売され、各地で繁殖した。レタスのような姿であるが、食べられない。在来種やイネと競合するだけでなく、過繁殖による水中への酸素・光の供給不足を招き、水質の悪化及び水生生物へ悪影響を与える。寒さに弱いことから冬には枯れていたが、淀川の一部では工場などの温かい排水が流れ込み越冬していた。その場所を駆除することで繁殖を抑制できたが、まだ見かけることがあるので、新たな越冬地があるのかもしれない。今年6月、国の許可を得ず自宅で栽培していた静岡県某の社員が警視庁に逮捕されたそうだ。



●3年前に庭窪ワンドで見つけたもの。冬だというのに、まだ青々としていた。



水をはじく
ピロード状の葉



水中に走出枝を出して
多数の子株をもつ

AN INVADER